

DōKō ネット

—同志社大学工学部同窓会報—
創刊号(1999)



What's New!

1999 年度工学部同窓会リュニオン

1999 年 11 月 27 日(土)

- 第1部 13:00～15:00 総会(無料) 新島会館
(京都市上京区寺町丸太町上ル)
- 第2部 15:00～ 卒業年グループリュニオン

ー卒業年グループリュニオンの世話役を同窓会事務局までご推薦下さいー

1999 年度のリュニオン第 2 部は各卒業年グループの世話役に
企画願いますが、特に 5 周年(1994; H6 年 3 月卒業生)、
10 周年(1989; H1)、15 周年(1984; S59)、20 周年(1979; S54) . . . の
5 周年毎の世話役の方々には特別に企画いただく予定となっております。

ホームページを開設いたします

<http://www1.doshisha.ac.jp/~kogakubu/dosokai/>
(URL のはじめは WWW1 ですのでご注意ください)

このページは工学部からのお知らせと共に工学部同窓会リュニオンの企画や
卒業生の方々の掲示板としてご利用いただきます。

本同窓会報 "D o K o ネット" 次号は 2000 年 2 月に発行いたします。
皆様の寄稿をお待ちいたしております。



ごあいさつ

同志社大学工学部同窓会会長
同志社大学工学部長
加納 航治

卒業生の皆さまにおかれましては、益々ご健勝でご活躍されていることとお喜び申し上げます。同志社大学工学部同窓会が発足し、今年で3年になります。今年と同窓会報をお届けすることになりましたが、その経緯をご説明させていただくことで、同窓会長としてのご挨拶に代えさせていただきます。

そもそも、工学部同窓会なるものがあつたのかというお気持ちの卒業生が多数おられるのではないかと存じます。従来、工学部同窓会の役割は同志社工学会が担ってまいりました。工学会には在校生も所属しており、かつ工学会の経常的な運営費は学生の納付金で賄われているのが実情でございます。このような状態では、同窓会としての自由な活動は極めて制限されてしまいます。そのため、工学会と同窓会とを分離し、かつ卒業生の縦、横の繋がりをより強めるために、同窓会を設立する必要があるとの判断から、1995年に工学部同窓会が発足し、第1回の幹事会が1996年3月に開催されました。この幹事会におきまして、工学部リユニオンは同窓会主催で行うことが決められ、以降、1997年および1998年のリユニオンは同窓会主催で実施いたしました。同窓会の会則は別記のとおりですが、なんと申しまでも、卒業生の皆さまが一同に会し、親交を深めることが、同窓会の主たる目的でございます。他大学に比べまして同志社大学の同窓会組織は弱体であります。母校との繋がりをもちたいと思っていながら、その機会が少なかつたり、繋がりをもつきっかけがないために、ついつい母校のことをかえりみなくなっていくというのが現状ではないかと思われまふ。このような観点から、ささやかではありますが同窓会報をお届けすることにし、このことにより、少しでも母校のことを思い出していただき、母校との繋がりを深めていただければと期待する次第であります。

同窓会を発展させ、実り多い会に育て上げるためには、どうしても卒業生各位のご協力が必要であります。現在同窓会は独自の予算を全く持っておりません。是非とも、卒業生全員に同窓会費を納入していただき、今後の同窓会発展にご協力賜りますよう、衷心よりお願いする次第でございます。皆さま方の、一層のご発展を祈念いたしております。

工学部同窓会リユニオン開催の経緯と会費納入のお願い

同窓会幹事会

巻頭に加納航治同窓会会長の挨拶にもありますように、在校生の納める会費が中心の工学会活動のなかに同窓会としての機能を混在させる事が会計上困難となり、3年前に工学会に属する形で同窓会がスタートしました。同志社大学工学部同窓会は、同窓生と同志社大学工学部の双方の発展に貢献することを目的としています。

卒業生の方々に大学を如何に利用して頂くかと、卒業生として如何に大学をサポートするかは、今後の課題と考えております。その目的のためには、まず同窓会を会計的に一人立ちさせる必要があります。このたび同窓会報を発行する機会に今年の工学部同窓会リユニオンのお知らせと会費納入のお願いをさせていただきます。工学部同窓会リユニオンも開催形態を改め、また同窓生の横と縦の交流を深める目的でホームページを開設することになりました。今後の工学部同窓会の情報はどうぞ同志社大学工学部のホームページからリンクしております同窓会のページ(<http://www1.doshisha.ac.jp/~kogakubu/dosokai/>)をご覧ください。

工学会のリユニオンは第1回を1987年に開催し、第2回はご家族を含め613名の御参加を得て田辺キャンパスで開催いたしました。その後1995年の震災の年を除き毎年開催され、1996年の第9回リユニオンより工学会と同窓会の共催となり、1997年の第10回から同窓会主催の工学部同窓会リユニオン(第2回)として一人立ちいたしました。今後は各卒業年グループ(各年度毎の各学科、各専攻の卒業生グループを単位として、卒業年グループと略称します)を主体としてリユニオンが開催されますので、各卒業生にとりましては1周年、2周年...10周年のリユニオンになります。特に節目になります5年ごとの卒業年グループは特別記念同窓会として開催して頂くことを考えております。

同窓会幹事会におきまして、同窓会組織、会報の発行、リユニオンの開催、同窓会会則、活動内容、運営とメールの郵送経費などについて検討し、年に一度の同窓会報「DOSHISHA NET」の発行と、年会費2,000円の徴収を決定致しました。工学部および大学院卒業生約2万3千名の方々に会報をお送りする印刷代と郵送料の経費およびリユニオン開催の経費負担や同窓会活動を活発にするために、会費の納入をよろしくごお願い申し上げます。また、同窓会リユニオンの企画を頂くために各学科の卒業年グループごとに世役役をご推薦いただき、同窓会へお知らせ下さい。

1998年度工学部同窓会年会費2,000円納入のお願いと工学会名簿調査

同封の用紙を郵送またはFaxにてご返送ください。

送金方法

1. 銀行振込 南都銀行京田辺支店(店番740) 普通預金口座 218806
口座名 同志社大学工学部同窓会 代表者 加納 航治
2. 郵便振替 同封の用紙をご利用ください。
3. VISA, Master Card 同封のFax用紙にてお手続き下さい。

★従来の同志社工学会の年会費とは異なります。

いま工学部は！

知識工学科

この春、第1期生64人が卒業しました。この内30人が知識工学科の大学院へ、1人が数理環境専攻へ、1人が他大学大学院へ進学、31人が就職、残りの1人は公務員志望で今年再挑戦です。今年度の卒業見込み生は102人で、その内39人が知識の大学院、2人が数理環境専攻、3人が他大学大学院へ進みます。また、就職希望者49人が内定を受けておりますが、5人が公務員志望あるいは卒業未確定などで未定、その他としてミュージシャンなどのフリーター志望が3人、海外留学予定が1人おります。

なお、昨春の学部入学者数は119人、大学院入学者数は上記の30人に外部からの入学者5名を含めて35人でした。18歳人口が減少し、入学希望者の定員割れが懸念される中で、わが知識工学科が高い倍率を保っているのは心強い限りです。

教員の異動としては、昨春三木先生の研究室(「知的システムデザイン研究室」に室名変更になりました)に東京工大から廣安知之先生を迎えました。また、今年度から知識工学概論Ⅰ・Ⅱ、コンピュータグラフィックスなどの新しい科目を開講し、カリキュラムの幅を広げました。98年度生の学年進行に従って、今春から画像処理、認知科学、インターネットなどの科目が続々新設されます。また、いくつかの科目名が変更になりました。

知識工学科の最上級生は現在M1ですので、知識工学科の大学院は現状では修士課程だけしかありませんが、最上級生が修士課程を修了する段階には博士課程を設置しておく必要があります。このため、この5月には文部省にその設置申請をします。

教務主任 柳田 益造

電気工学科・電子工学科

電気系学科在籍人数は電気工学科 677 名、電子工学科 668 名、大学院博士課程(前期)147 名、博士課程(後期)5 名です(10 月末現在)。次に研究室紹介として、以下に研究室名と担当スタッフを示します。

◇光・電子回路システム第1研究室(大田建久・一ノ瀬琢美)◇光・電子回路システム第2研究室(佐々木和可緒)◇プラズマ応用第1研究室(行村建)◇プラズマ応用第2研究室(藤田一郎・小野雅章)◇電気電子材料第1研究室(大鉢忠・森山英隆)◇電気電子材料第2研究室(吉門進三)◇電気回路研究室(加藤利次・藤井繁信)◇電力系統解析研究室(雨谷昭弘・長岡直人・森延孝)◇超高周波工学研究室(繁沢宏・辻幹男・松尾豊樹)◇電気機器研究室(戸高敏之・石原好之・原田和郎・吉川善直)◇超音波エレクトロニクス・応用計測研究室(大谷隆彦・渡

辺好章・松川真美)◇応用物理研究室(和田元・粕谷俊郎・姫野有三)◇応用数学研究室(大宮真弓・渡邊芳英・梶原健司)

本年度(来年4月就職)の就職内定率は、TVや新聞等で超氷河期再来とのことですが、卒業生が活躍されている実績のおかげで、例年とほぼかわらない内定状況です。10月末現在の電気工学科、電子工学科合わせての就職希望者数284名中、内定者174名、大学院進学決定者93名その他17名(進学希望13、公務員志望1、未定3)。大学院前期課程の就職希望者数75名中、内定者69名、その他6名(進学希望1、公務員志望4、未定1)です。そして学部、大学院合わせ企業への内定内訳は大企業6割、中企業3割、小企業1割程度です。

教務主任 大田 建久

いま工学部は！

機械システム工学科・エネルギー機械工学科

ご存じのように機械系学科では、1994年度に学科名の変更を行い、機械工学科は機械システム工学科、機械工学第二学科はエネルギー機械工学科となりました。現在学生在籍者総数1464名で、その内訳は、機械システム工学科、1年生190名、2年生159名、3年生190名、4年生129名、総数668名であり、エネルギー機械工学科は1年生153名、2年生123名、3年生215名、4年生149名、総数640名です。一方大学院(工学研究科機械工学専攻博士課程)は総数156名で、その内前期課程(修士)は1年生73名、2年生76名、計149名であり、後期課程(博士)は7名が在籍しています。

98年度学生たちは次の研究室にて活発な研究を行っています。機械工作研究室(青山栄一教授)、機械要素研究室(坂口一彦教授・松岡敬教授)、構造工学研究室

(藤井透教授)、噴霧・燃焼工学研究室(藤本元教授・千田二郎教授)、制御工学研究室(原敬教授・横川隆一助教授)、材料工学研究室(今井田豊教授・長谷部忠司専任講師)、材料応用工学研究室(片山伝生教授)、伝熱工学第一研究室(吉川進三教授)、伝熱工学第二研究室(千田衛教授)、トライボロジー工学研究室(小林真造教授)、金属材料科学研究室(御牧拓郎教授・宮本博之研究助手)、機械力学研究室(小泉孝之教授・辻内伸好助教授)、流体工学研究室(山口博司教授)、流体力学研究室(平田勝哉助教授・舟木治郎専任講師)、応用力学研究室(水島二郎教授)、数学研究室(浦辺治一郎教授・押目頼昌教授)、物理学第一研究室(小堀至教授)、物理学第二研究室(佐藤昌史助教授)の17研究室です。

教務主任 今井田 豊

機能分子工学科

最近、化学以外の分野においても、分子を研究の対象にしなくてはならなくなってきました。その理由は、酵素や遺伝子あるいは半導体や記憶素子は、つきつめれば分子からできているためです。化学が軸となり、化学がその関連領域と関わることから新しい発見、展開が生まれてきます。このような学際領域の化学を教育・研究するため従来の工業化学科を改組転換し、機能分子工学科が設置されました。

機能分子工学科には応用化学コースと生物関連化学コースを設けています。学生は自分に合ったコースで生き生きと学ぶことができます。1, 2 年生では有機化学、無機化学、物理化学、分析化学、高分子化学、生化学、反応論などの基礎科目を修得します。3年次では、コースによって選ぶ科目が少し異なってきます。応用化学コースで

は合成化学、反応機構、電気化学、ファインセラミックスなどを、生物関連化学コースでは生物無機化学、生物有機化学、バイオテクノロジー、生体高分子などを学びます。最終の4年次では卒業研究が必修です。はじめて本学が豊富に所有する先端装置を駆使した研究に触れることができます。

卒業後の進路については、工業化学科時代からの輝かしい歴史と実績があります。化学が関連するあらゆる分野へ進出し、就職率は常に100%です。また、学界で活躍している先輩が多いのも著しい特徴です。もちろん同志社大学をはじめ、全国の国立大学の大学院へも進学し、高い評価を受けています。(1999年大学案内より引用)

教務主任 東 信行

いま工学部は！

物質化学工学科

現代の工学では自然との調和を図る技術の統合化が要請されています。物質化学工学科は、このような高度先端分野に関わる化学物質の生産プロセスにおいて、マイクロからマクロまでのスケールでの構造制御や最適設計などの先端的な生産技術を統合化するために、人と環境にやさしいシステムの創製をめざす工学分野です。

このような理念に基づき、本学科では、新素材のシステム設計からバイオプロセス制御までの広範囲にわたる研究対象を統合的に取り扱いながら、基礎および応用の両面にわたる研究を意欲的に進めています。

すなわち、生産プロセスにおける物質・エネルギーの移動と変換システムの確立、分子や原子レベルでの反応制御、化学物質のプロセス設計法や化学計測法の開発、超微粒子や生体材料および地球環境に関わる動的な材料

システムの構築、有用物質を生産するための生物反応における制御プロセスの設計などの研究に重点をおいています。

そして本学科では、従来の化学工学科とは異なるこれらの工学的手法に基づき、問題解決能力と創造性を育成する基礎教育を行い、高度先端分野です活躍できる独創的な人材を養成します。

卒業後の進路は、卒業生のほとんどが希望の業種につき、極めて高い就職率を誇っています。そして、30%以上が大学院に進学し、さらに高度な研究に打ち込んでいるのも特徴です。大学院修了者への社会的ニーズは高く、多くは研究分野に就職しています。(1999年大学案内より引用)

教務主任 東 信行

数理環境科学専攻

1998年4月から同志社大学工学研究科に独立専攻として数理環境科学専攻が設置され、第1期生31名が入学しています。設置の趣旨と内容は、以下の通りです。

現代社会にとって環境問題は避けて通ることのできない課題となっている。たとえばオゾン層の破壊、地球温暖化、熱帯雨林の減少、核廃棄物管理などであるが、こうした現象に対する研究は、まだまだ初歩的な段階にとどまっている。学際的で複数の研究分野にまたがる問題が多く、既存の学問分野だけでは解決できないからである。

本専攻は、環境解析と環境保全技術の接点から環境問題を捉えることを共通の基盤とし、コンピュータを活用して、この解決を考え環境問題を見通すことができる能力を有する研究者や高度技術者を養成することを目的として4コースがもうけられている。

1) 数理モデル分野コース;このコースは、コンピュータで

の解析に耐える形で環境の数値化を行い、環境の数値解析を行う。

2) 地球環境分野コース;このコースでは、地球・自然環境について研究し、その成果を数値化して数値計算を行う。水の流れや物質拡散など、自然の時間的な変化などの解析である。

3) 人間環境分野コース;このコースは、人間環境のさまざまな局面を研究する。その成果を数値化して人間をとりまく環境の数値解析を行う。人間社会と生物生態の関連性や人間活動による科学物質の移動と人体への影響などの解析である。

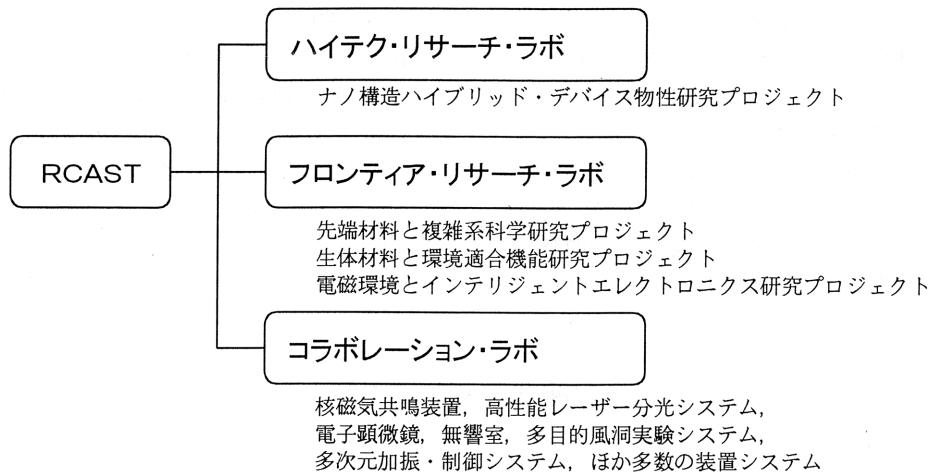
4) 総合環境分野コース;このコースでは、自然・社会・人文などの諸科学に共通した問題を研究する。

専攻主任 横山 卓雄

同志社大学工学部産学交流体制

1. 先端科学技術センター(RCAST)

同志社大学工学部では 1994 年 4 月田辺キャンパスへの全面的な統合移転を機に、学外の方にも共同で利用していただける実験施設として創考館を建設し、多くの研究成果をあげてまいりましたが、さらに、1997 年にはこの創考館を主施設として、先端的な技術研究開発と、産学交流をより一層推進するため先端科学技術センター (Research Center for Advanced Science and Technology, Doshisha University 略称 RCAST) を新たに設立いたしました。RCAST は次の 3 つのラボから構成されております。



2. 工学研究科連携大学院プログラム

多様な社会の要請に応じられる柔軟な問題解決能力を身につけた科学技術者を有するため、本学工学研究科と国公立の研究機関あるいは民間企業の研究所・センターとお互いに連携して大学院の教育・研究を行うプログラム「連携大学院」を実施しております。これら産官との連携には大学院生を軸とした共同研究体制を確立し、社会のニーズに促したアトラクティブで高度な研究の遂行により、工学研究科の研究能力を高め、同時に有為な若い人材を育成しております。

3. 海外諸大学・研究機関との国際交流協定

フランスの大学2校(リール中央学院, パリ工業物理化学高等専門学院(ESPCD)), 韓国の大学1校(全南大学校)と工学部独自の交流協定を締結し、国際化を推進しております。フランスの大学2校とは、学生の交換も行なっており、内リール中央学院とは修士在学中に本学と相手大学の2つの修士学位が取得可能な協定(ダブルディグリー制度)を締結すると共に、1998年11月フランスにおいて第1回の工学部国際交流学術発表会を実施し、本学から工学部長はじめ教員13名が参加いたしました。

同窓生と工学部との交流

1. 教育・研修の場の提供

(1) 大学院工学研究科の社会人入学制度

企業・研究所および官公庁で働く社会人に、近年の急激な科学技術の革新に対応できる高度な知識・能力を養っていただき、企業の技術水準をより高めていただくために、修士学位取得コース(博士課程前期課程)、博士學位取得コース(同後期課程)への社会人の特別入学制度を実施しています。詳細は工学部・工学研究科事務室へ。

(2) 研修員受け入れ制度

社会人に専門分野に関する高度な知識・能力を養う場を提供するために、研修員制度を実施しています。研修員につきましては実験系 8,000 円/月、非実験系 6,000 円/月ですが、多くの消耗品を必要とするテーマの場合につきましては、受託研究制度等の申し込みについて、担当教員とご相談下さい。

2. 研究・試験環境(人材、設備)の提供

(1) 受託研究・調査・試験制度

理工学研究所を窓口として、企業および官公庁との共同研究や企業および官公庁では実施できない研究・調査・試験等の委託を受け付けています。例年約 40 件程度を受け入れ実施しております。詳細は理工学研究所事務室へ。

(2) 奨学寄付金

企業および個人から寄付金等を受け入れて、学術研究や教育の充実・発展に活用するものです。

(3) 共通研究施設、工学部共通図書室の利用

工学部の田辺キャンパスへの移転にともない、共通研究施設、共同図書室を建設いたしました。これを企業・研究所および官公庁の方々にも利用していただけるようにしております。

3. 工学部入試体制

本学工学部では、1999 年度より一般の入試として従来通りのもの(A方式)と英語の得点比率を少なくしたもの(B方式)を実施しました。他の入試としては、大学入試センター試験を利用した入試、アドミッションズオフィス入試、工業高等学校等からの推薦選抜入試、一般高校からの推薦入試、学内 4 高校および新島学園高校からの推薦入試等があり、種々の入試による多様な学生の募集を行っております。詳細は工学部・工学研究科事務室へお問い合わせ下さい。

4. 工学部オープンキャンパス

入学志願予定者を対象に、毎年 7 月下旬から 8 月上旬に、田辺キャンパスで1日、今出川キャンパスで 2 日、オープンキャンパスを実施しております。オープンキャンパスでは、各学部の教員による学部説明、学部カリキュラムおよび学生生活全般の質問コーナーを設け、多くの参加者を集めております。特に、田辺キャンパスで行われる、教員の説明による工学部研究室の公開は好評です。

今出川キャンパス ハリス理化学館の施設

下記の卒業生ラウンジをご自由に利用して頂けます。また、Neeshima Room では同志社設立の経緯をご覧ください。

・卒業生ラウンジ 1F 9:30~17:00(土曜 12:00)

連絡先 企画部企画室校友課 Tel:075-251-3009

・Neeshima Room 「ハリス理化学校記念室」2F

9:30~17:00(土曜 12:00)

連絡先 同志社社史資料室 Tel:075-251-3042

ひとことエッセー



企業より 今大学に望むこと

1965年機械工学科卒、博士 米澤 徹

20世紀後半の日本は、一面焼野原の敗戦国から発展途上国、先進国、そして現在は最先進国へと戦後50年間に急激な発展をした他に例を見ない国である。戦後の日本の復興と発展は時代と国の環境がうまくマッチしたと言っても過言ではない。我が国は天然資源が乏しく資源といえば人であった。明治維新に欧米の文化知識を日本流に翻訳した学校教育のおかげで、復興時に於ける産業分野に於いても欧米を範とし日本流産業として翻訳する土壌が作られており、欧米の技術を模倣、改良し日本流の産業の発展へとつなげた。では21世紀に於いても同じテンポは無理としても、世界の最先進国として発展し続けることが出来るであろうか。

技術革新が終わると、後はいかにうまく安く造るかだけになり労働賃金の安い国が勝つ。天然資源が乏しく人材資源のみの日本は、技術革新が停滞すれば後進国の追い上げを受ける。日本が発展し続けるには人材資源をいかに有効に活用するしかない。すなわち創造性豊かな人材を育て、独創的な技術革新による研究開発を基盤とし、産業を活性化させなければならない。言葉では簡単であるが、これを実行するのは日本人は苦手であった。しかしながら21世紀においても日本は発展し続けなければならない。

このためには、企業と企業は勿論、企業と大学がお互いの持っている良い所を出し合い、弱い所を補完し合う必要がある。このような状況のもとで大学に望むこと、すなわち大学の役割機能は、二つ有ると思う。

まずその一つは、創造性豊かな人材となり得る学生を育成することである。近年当社に入社してくる若手技術者は皆頭がよく、一生懸命“自分の課題”に取り組んでいる。こう表現すれば、何の問題もない様に思われる。しかし、彼等が考えている“自分の課題”が問題なのである。課題とそれに到達する方策を示されると、それに向かって自分の持っている知識をフルに使って、また不足しているもの

は勉強しながら挑戦している。しかしながら、課題を明確にせず、自分で考え提案してくる様に指示すると、何をしたいのかわからない。仮に提案があっても独創性に欠ける。すなわち、与えられる生活に馴れ、自分で獲得する訓練が出来ていない。これでは欧米の民族に負けてしまう。バブル期、すなわちフォローの風が吹いていた時には、これでもよかったのかもしれない。バブルが潰れ現在の様に逆風が吹き荒れている中で生きて行くには、自分の必要なものは自分で獲得しなければならない。

小さな頃からの教育にも大きな問題がある。正しいかどうか疑問はあるが、遅まきながら文部省も重い腰を上げ、小中学校の教程の一部見直しを発表した。では、我々は大学に何を求めるのか。小学校、中学校、高等学校と育ててきた生徒を手直して育てるのではなく、社会人として巣立って行く時の理想の学生像を描き、小学校は、中学校は、高等学校は生徒をどの様に育てるべきかを提案すべきではなからうか？

勿論、知識教育も必要であるが、その使い方、物事の論理をきっちり順序立てて展開出来る能力開発、すなわち学校で学んだ知識を知識として保有して終わらせるのではなく、それらを使って、知恵として活用出来る能力開発を育成するような教育のあり方とは？

もう一つの役割は独創的な技術革新による研究開発、すなわち基盤技術の研究である。一般に商品開発にはニーズ型商品開発とシーズ型商品開発があるといわれている。

ニーズ型商品開発は、顧客が何を求めているかをきっちり調査分析(マーケティング)し、その中から商品像が浮かび上がってくるものであり、企業が取り組む課題である。

一方、シーズ型商品開発は、“このような新技術が開発された”“このような新素材のできる見通しがついた”ことを契機とし、その技術を中核とした用途開発を行うものである。

ひとことエッセー

カーボンファイバーと言う素材が開発され、ゴルフのクラブシャフトに、あるいは釣竿、テニスのラケットにへと用途展開され、航空機、高速車輛のパーツとしても陽の目を見ようとしている。他にも、ナイロン、トランジスタ、江崎玲於奈博士が開発したエサキダイオードなどが考えられる。

大学における研究の一部はこの様な基盤技術を開発することであると思う。

そのためには、今の論文重視の評価に合わせて特許と言うものの重要性を認識すべきではなかろうか。数ヶ月前に特許庁の技官とお話しする機会があり、その時、特許庁としても、「もっと大学からの特許というものを啓蒙して行きたく考えている」と言われていた。

勿論、若い技術者が先端知識を得るために参考とする論文は是非必要であり、中核技術開発プロセスでの論文

も必要である。しかしながら中には、一度も他人の目に触れることもなく消えて行くもの、どこか他の学会に出したものの焼直し、少しの肉付けで提出されている論文もないとは言えない。もっと、論文の審議を厳しくし、本来の、すなわち、オリジナリティ性のある論文としないためであらう。

以上、忌憚のない所を述べさせてもらいました。もし失礼に当たる個所がありましたらお許し下さい。併せて、大学から我々企業に望むことを聞かせてもらえれば幸いです。この同窓会報が企業と大学、あるいは企業と企業の自由な意見の交換の場となればと思い、私の“ひとこと”を終わらせていただきます。

ヤンマーディーゼル(株)常務取締役
技術研究所 所長

閑話休題—新島襄と自然科学—

日本にまだ官立の大学が東京にただ一つしかなかったとき、新島襄は同志社を日本最初の私立総合大学に発展させてこれと対抗しようとする壮大な夢をいだいていた。その総合大学の一環として理学部を構想した背後には、新島自身の科学との深い関わりがある。

新島は渡米前すでに、当時の日本で最も早く西洋の最新技術を学ぶことができた少数者の一人であった。それは、17歳から2年間、江戸築地の軍艦教授所で航海術を学んだことである。それは、幕府の海軍士官養成所であり、明治政府がこれを受けついだのが、後の海軍兵学校である。築地の軍艦教授所は、長崎海軍伝習所でオランダ海軍士官から指導を受けた第1期伝習生が教授となったもので、幕末の日本における最高レベルの組織的な科学教育は、長崎と江戸の海軍教育であった。新島が入所したのは1860年、この年、長崎伝習第1期生は咸臨丸による太平洋往復横断に成功して意気軒昂たるものがあつた。航海術は科学そのものであり、その基礎は数学である。新島はそこで算術、代数から球面三角法にいたる数学をオランダ語を通して習得した。それは従来への蘭学のような机上の学問ではなく、天測、測量をとらぬ実践的なものであつた。

同志社大学百年史—通史編1—より

ひとことエッセー



マスラオ
良心と丈夫

1964年電気工学科卒 藤原 義博

年に僅かであるが、非常勤講師として知識工学科の集中講義をさせていただいている。人に教えるという器でないことは百も承知だが、企業人の立場から、最新技術の応用面について、多少なりとも学生諸君の参考になればと、母校へのささやかなご恩返しのつもりでお引き受けさせていただいた。

講義での感想は、学生諸君が大変真面目でおとなしいということである。私語をかわしたり、内職をしたりせず、熱心にノートをとっているし、提出されるレポートの内容もしっかりしている。ならば結構なことではないかと言われそうだが、実はそうでは無い。生身の人間に対してのではなく、ディクテーションマシンに向かって話をしている感じなのである。講義の中身を棚に上げておいて贅沢な注文なかも知れないが、射竦めるような眼差しまでいかなくても、せめて反応が欲しいのである。

最近、企業においてもイントラネットが普及し、電子メールによるコミュニケーションが多くなってきている。そのため、技術者としての一つの大切な要素である相手の顔を前にして持論を展開していく力、相手を説得あるいは論駁する力が弱くなってきていることを危惧している。是非、学生諸君には、お互い自由に意見を戦わす中で、そういう力を身につけていってほしいし、学校側にもそういう覇気ある風土の醸成をお願いしたい。地面に座り込んでいられるいわゆる「ジベタリアン」をキャンパスでも散見するが、どうか流行りの一現象で、精神まで疲れ切っていないことを望む。

卒業生を含めた同志社人を評して、Decent Doshisha Menと言われることがある。見るからに人が良くて、おっとり上品で、優秀であるということであろう。人を踏み台にしてまでも伸し上がるという人は、まずいない。これは誇るべき校風であり、キリスト教精神に基づく教育の賜物であると思う。しかし、一方で、おとなしくて自分の意見をあ

まり言わない、消極的である、リーダーシップが乏しい等の批判があることも一面で否定できない。良心的で謙虚であるということと、意思を明確に表明したり、自己の能力や成果を正しくアピールすることとは、決して相矛盾するものではない。逆に、グローバル化した最近の社会では、明確に個人や組織のアイデンティティを打ち出すことが重要である。このような意味で、同志社と同志社人は、遠慮することなく、世の中にもっと自己の存在と主張を訴えても良いのではないか。

新島襄先生の言葉の中に、私の好きな「良心の全身に充満したる丈夫」と「トキク儻不羈なる書生」がある。（トキク儻：才気があって優れていること。トキク不羈：縛り付けられないこと）

現状では、「良心の全身に充満したる」同志社人であり、「トキク儻なる」同志社人であることは間違いないが、これでは、建学の精神の半分しか満たされていないのではないか。残りの半分である「トキク不羈なる書生」や元気な「丈夫」が輩出するには、相当の努力が要るように思われる。

最近のインターネットの同志社大学ホームページでは、学長自らが率先して「サイバー学長室」をオープンされ、大いに情報発信をしておられるのは、誠に頼もしく、うれしいことである。工学部でも、高度な学術研究の成果を上げていただいているのは十分承知しているが、そのことを学会や社会に積極的に発信し、真価を世に問うことに一層の努力をしていただきたいと念ずる。結果として、私学特別補助金や科研費のランクも上がってくるかもしれない。

非常に失礼なことばかり述べたが、これも同志社を愛する一人の同志社人の心配事だとお許しいただきたい。学生諸君の一面だけを捉えての、同志社や同志社人に対する私の判断が、どうか皮相的誤解であることを望む。実はみんな「トキク不羈なる丈夫」ばかりなのだということに。

松下電器産業(株) 理事
電化・住設社 副社長



ひとことエッセー

私学の自由

1967年工業化学専攻修了 砂本 順三

工学部、大学院工学研究科の同窓生の一人として、この度の「同窓会報」の創刊は誠にお目出度く慶びにたえません。発刊に漕着けるまでの関係者の方々のこれまでの御苦労は、さぞかし大変なものであったろうと察し、心より感謝申し上げます。

京の地での近代化学教育の始りは、京都舎蜜局(1870)の設置に続く同志社波理須理化学校(1889)の開校、第3高等学校(京都)工学部(1894)とその後の京都帝国大学理工科大学(1899)の開設へと続きました。私自身化学を専攻し、その由緒あるハリス理化学館の一室で研究にいそしんだ40年近い昔の日々を思い起こすにつけ、理化学館の正面に彫られた"SCIENCE, 1889"の文字列の伝える歴史の重みと、One Purpose, Doshisha, thy name doth signify one lofty aim.の精神のもつ意味の重さが私にとって益々大切になってきたこの頃であります。

新島襄先生の当時の建学の精神は、その後の日清、日露戦争や世界大戦を通して富国強兵の思想に操られ、また第2次世界大戦後は工業立国の波にもまれ、ひどく歪められたような気がします。現在同志社を離れ国立大学に身を置く者として”外からひとこと”言わせて頂くとすれば、周りを取り巻く社会情勢を意識し過ぎることでややもすれば陥り易い企業経営的思考を捨て、いま一度新島先生の建学の精神に立返り私学の独自の教育理念に基づいた経営を探求して頂きたいという願いであります。勿論「言うは易く、行は難し」であることもよく承知しております。しかし、経営が苦しいからとて私学が安易に国からの助成金に頼ってはいは、決して「私学の自由」を保つことは出来ないでしょう。これを完全に断切ってこそ初めて「私学の自由」がえられるのではないのでしょうか。そのためにも、師弟を私学に学ばせている父兄の税優遇制度、私学教育を助成するための民間・個人の寄付行為に対する課税免除、大学の教育・研究に関する一切の経費に対する免税

措置などをもっと積極的に訴えて行くべきではないでしょうか。勿論学内の教官一人一人も、研究費を学生の収める入学金や授業料にのみ安易に頼ることなく、自らの努力によって学外からも導入することをもっと真剣に心掛けるべきでしょう。

「この道は篤く神と通う知徳、幸あり同志社、三つ葉のクローバ、治めよ自ら矜れ私学、京都の山河は清かに守らん。樹えよ人を、輝け自由。我ら我ら地に生きん。」ご存知のように同志社大学歌の一節です。工学部同窓会報の創刊を機に、現役も卒業生も一つになって、いま一度校祖の建学の精神を省み、私学の完全な自由を手にするべく努力しようではありませんか。

京都大学工学研究科
合成・生物化学専攻 教授

Doshisha College Song

Words by W.M. Vories
Music by Carl Wilhelm

One purpose, Doshisha, thy name
Doth signify one lofty aim;
To train thy sons in heart and hand
To live for God and Native Land.
Dear Alma Mater, sons of thine
Shall be as branches to the vine;
Tho' through the world we wander far and wide,
Still in our hearts thy precepts shall abide!

ひとことエッセー

「先生」と呼ばれて

芳賀 博英

大学を卒業して18年、このうち14年間は民間企業にエンジニアとして勤務し、5年前に大学に戻ってきた。会社にいる頃からいろいろな大学の先生とお付き合いをいただいていたが、その時には勿論こちらが先方を「先生」と呼ぶ立場であった。しかし5年前から立場が逆転し、私が先生と呼ばれる立場になった。事務職員の方々や学会などでお会いする企業の方々から「芳賀先生」と呼ばれるようになった。また同志社に限らず多くの大学では、教員同士はごく自然にお互いを「〇〇先生」「××先生」と呼び合っている。着任当初はこれにかなり違和感を覚えていた。と言うのも以前の職場では、会社生活の必須アイテムである「課長、部長」という呼称がなかったのである。私を含め周りの人間は誰一人として「〇〇部長、××課長」

とは呼ばずにすべて「〇〇さん」と呼んでいた。そろそろ大学でも「〇〇先生」という呼称はやめて、世間一般の常識に合わせて「〇〇さん」と呼びませんか？「先生」という呼称は便利なもので、政治家、芸術家、作家、タレントなど、いろいろな職種の人を呼ぶのに使えますが、いずれも世間一般からは多かれ少なかれ乖離していると見られている職業です。それらと同じ呼称を使うことに多少なりとも抵抗感を感じ、それを変えてゆこうとするところから、小さなものながら一つの「改革」の芽が生まれるような気がします。と言うことで「大鉢さん」と呼んでもいいですか、大鉢先生？

同志社大学工学部知識工学科 助教授

ヒューマンネットワーク

戸高 敏之

同志社大学工学部は源となるハリス理化学校の設立からすでに百余年が経過し、この間、多くの人材を輩出してきました。科学技術の進展は目覚ましいものがあり、21世紀を目前にした今日、特に、マルチメディアの進展による情報通信の高度化は社会構造を大きく変化させようとしています。

高度情報化社会では、世界的規模の交流が教育・研究や文化などあらゆる面で一層進み、協調と共生が強化される一方競争も世界規模となります。国際的な競争の中で、大学が社会の期待に応えて教育・研究活動を展開していくためには、産業界をはじめ社会との連携をより推進していくことが必要となります。

学生が目的意識を持って学習していくためには、社会のニーズや動向、技術水準などを把握することが必要で

あります。また、社会人にとっては、新しい知識の習得、いわゆるリフレッシュ教育や、真の豊かな生活を実現するための生涯学習の場としての大学の役割もより重要となってくることから、連携・交流が必要であります。

マルチメディアの進展による高度情報システムの活用は、これらの連携・交流を実現するための強力な手段であり、本学も情報ネットワークを整備充実していますが、真の交流は人的交流であるヒューマンネットワークの構築が重要であります。

同窓会は、信頼できるヒューマンネットワークでありますので、より一層の強化されることを期待しています。

同志社大学工学部電気工学科 教授

ひとことエッセー

40年を回顧して

吉川 進三

1959年本学に入社以来、早いもので40年が経過した。その間の特筆すべき出来事といえば、ハード面では田辺移転、ソフト面では学園紛争であろう。ここでは、後者についての思い出を少々述べたい。

1969年度に入ると共に紛争は激化し、建物は次ぎ次ぎと封鎖され、講義をする事が困難になって来た。封鎖されていない建物で講義をしているとヘルメットに覆面の男が入ってきて妨害し、小生などは横顔を殴打されて、鼓膜に傷を受ける始末であった。それでも、工学部は学内でも最も遅くまで、細々と授業を続けたと思う。近くのお寺の一室を借りたり、御所の庭の大木の幹に図面を画鋏で止めて製図の授業をしたのを思い出す。しかし、工学部ではいわゆる“自己批判”をすることはなかった。自己批判をせねばならないような悪いことは何もしていないし、もしも自

己批判をせねばならないような状態になったら、自己批判書よりも辞表を書くというのが当時の考えであった。暴力学生におもねっているかとも思われる『大学の運営に関する臨時措置法案に反対し“教職員ストライキ”を提起する』という声明を発表した或る学部とは対照的であった。

その後学長の決断によって警察機動隊の入構が要請され、曲がりなりにも授業が再開され、夜遅くまで講義や試験が行なわれ、卒業と入学が行われた。私学にとって、東大のような入学試験中止は廃校につながる恐れがある。このような困難を経て今日の同志社があることを知ることも必要であろう。

同志社大学工学部機械システム工学科 教授

化学系の就職状況

立脇 徳松

化学系にとってこの数年間は、田辺キャンパスへの移転、工業化学科と化学工学科のそれぞれ機能分子工学科と物質化学工学科への改組転換、創設期から活躍された10名の先生方の定年退職と11名の若い先生方の着任、大学院定員増、と大きな変革の時期でした。

幸にも、全て順調に推移し、一層の発展を望める状態となりました。勿論、少子化対策、大学院の充実、研究活動の高揚、産業構造の変化への対応等、現在も真剣に取り組まれています。工業化学科創設後10年頃に当たる40年前と比べますと、教員数と学部学生数は約3倍、大学院生数は10倍程度になりました。実験設備も、NMR、電子顕微鏡、質量分析装置、X線構造解析装置、表面分析装置等、以前と比較出来ない程充実してきました。

昨年度の化学系就職委員をしておりましたので、就職状況に関して少し述べます。就職希望者は学部生207名、大学院生106名の計313名でしたが、化学系にきた求人は約500社、大学にきた文系就職のうち化学系も対象にした求人が約400社あり、公務員と弁理士志望者の一部の他は、全員が就職出来ました。不況下での就職戦線でしたので、心配していたのですが安堵した次第です。来校された250社の人事担当者は、口を揃えたように、キャンパスの立派さを称え、OBの活躍ぶりを披露された後、企業のPR、採用後の職種の説明をされ、世間知らずの私にも好い勉強をさせて頂きました。

同志社大学工学部物質化学工学科 教授

同志社大学工学部同窓会会則

総則

- 第1条 本会は同志社大学工学部同窓会(以下同窓会と略す)と称する。
- 第2条 本会は会員相互の親睦を厚くし、会員(同窓生)と同志社大学工学部の双方の発展に貢献することを目的とする。
- 第3条 本会は前条の目的を達するために次の事業を行う。
1. 研究会, 講演会
 2. 同窓会報の発行
 3. 同窓生懇親会(リユニオン等)の開催
 4. その他必要と認められる事項
- 第4条 本会事務局の設置場所は、同窓会幹事会において決める。

会員

- 第5条 本会の会員は、同志社大学工学部(大学院および旧工業専門学校を含む)卒業生、学生として在籍した者、工学部の現教職員、および元教職員とする。会員の年会費は2千円とする。

幹事会と役員

- 第6条 本会には、各学科において互選された各学科数名の学外幹事および数名の学内幹事を置く。幹事会は、会長1名と幹事より構成し、幹事長もしくは会長が、幹事会を召集する。

- 第7条 本会に会長1名を置く。会長は総会において選出する。また本会に幹事長を置く。幹事長は幹事会において選任する。
- 第8条 幹事会は毎年度事業計画を立て、事業を行う。
- 第9条 会長および幹事の任期は、原則として2年とし、再任を妨げない。幹事は、自己の都合により幹事を辞任する場合、幹事会に後任者を推薦できるものとする。
- 第10条 本会は、会計監査を行う監事2名を置く。
- 第11条 幹事会は、年1回、1年間の事業報告書(決算報告を含む)を作成する。
- 第12条 幹事会議事録、事業計画、事業報告書は本会事務局に保管する。

総会

- 第13条 本会は原則として年1回総会を開催する。
- 第14条 総会は会長がこれを召集する。
- 第15条 次の事項は総会に報告する。
1. 前年度決算書
 2. 事業報告書
 3. その他幹事会で必要と認めた事項
- 第16条 総会の議事録は本会事務局に保管する。

付則

1. 本会の会則の変更は幹事会で起案し、総会および工学会評議員会で承認を得る。

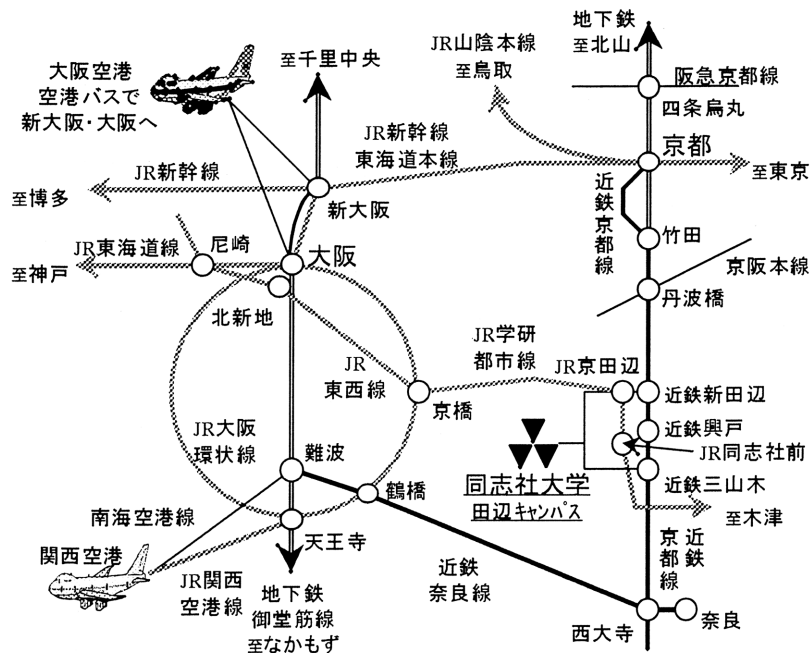
1998年9月5日改正

工学部同窓会幹事

	氏名	卒業年	所属
会長 (学部長)	加納 航治		同志社大学工学部
学外幹事	電気系	上西 勝也	S37 電気 園田計器工業(株)
		藤原 義博	S39 電気 松下電器産業(株)
		橋詰 源治	S43 電気 (株)橋詰気工業所
	機械系	中村 成男	S42 機械 (株)堀場製作所
		大久保 稔	S56 機械, S58 修機械 ヤンマーディーゼル(株)
		田中 達也	S58 機械 II, S60 修機械 (株)神戸製鋼所
		瀧 高弘	S62 機械 三菱自動車工業(株)
		深見 洋司	H1 機械 II, H3 修機械 川崎重工業(株)
	化学系	中山 仁郎	S39 工化, S41 修工化 日本ニューマチック工業(株)
		近持 隆	S41 工化 パクセルインターナショナル(株)
		堀内 健一	S49 工化 ニッタ(株)
		湯浅 智	S53 工化, S55 修工化 日新電機(株)
		中村 清己	S55 化工, S58 修工化 宝塚市立高司中学校
	学内幹事 (幹事長)	知 織 電気系	芳賀 博英
大鉢 忠			tohachi@mail.doshisha.ac.jp
長岡 直人 機械系		長岡 直人	nnagaoka@mail.doshisha.ac.jp
		千田 二郎	jsenda@mail.doshisha.ac.jp
平田 勝哉 化学系		平田 勝哉	khirata@mail.doshisha.ac.jp
		塚越 一彦	ktsukago@mail.doshisha.ac.jp
田中 義文	ytanaka@mail.doshisha.ac.jp		
監事	(前会長)	戸高 敏之	同志社大学工学部
	(前幹事)	米澤 徹	S40 機械, 博士 ヤンマーディーゼル(株)
前幹事	電気系	中野 恵二	S55 電子 富士通テン(株)
		大田 建久	同志社大学工学部
	機械系	汐見 知行	S45 機械 II 三菱自動車工業(株)
		辻 克巳	S45 機械 II 住友電気工業(株)
	化学系	東城 哲朗	S51 工化, S53 修工化, 博士 東洋炭素(株)
		山口 修	同志社大学工学部

同志社大学ホームページアドレス <http://www.doshisha.ac.jp/>

工学部同窓会ホームページアドレス <http://www1.doshisha.ac.jp/~kogakubu/dosokai/>



同志社大学 田辺キャンパス

〒610-0321 京田辺市多々羅都谷1-3

工学部・工学研究科事務室 Tel:0774-65-6200 Fax:0774-65-6800

理工学研究所事務室 Tel:0774-65-6220 Fax:0774-65-6804

同志社大学工学部同窓会へのご質問、ご意見あるいは
本冊子「DOKOネット」へのご投稿をお待ちしております。
同窓会事務局(大角)あてご自由に連絡、投稿下さい。

1999年3月1日発行

同志社大学工学部同窓会

発行者:加納 航治

〒610-0321 京田辺市多々羅都谷1-3 同志社大学工学会内

工学部同窓会事務局 Tel:0774-65-6219 Fax:0774-65-6850

印刷者:(有)木村桂文社 Tel:075-381-9784 Fax:075-381-1510

いつまでもカタチに残るメモリアル 同志社オリジナルグッズ



同窓会の皆様へ

同志社オリジナルグッズは、同志社大学関係者・OBの方のご利用に支えられ、今では多彩な品揃えをしております。

その中でも特にご好評なグッズを中心にこの度パンフレットを新しく作成しました。

皆様方のご利用をお待ちしております。

パンフレット請求・お問い合わせ先

同志社生活協同組合

オリジナル商品係

〒610-0321

京田辺市多々羅都谷1-3

TEL 0774-65-8375

小橋、中村

